

阪神淡路大震災追悼行事 講話

今、私たちは阪神・淡路大震災で亡くなられた方々を悼（いた）み、黙とうを捧げました。

1995 年 1 月 17 日、午前 5 時 46 分。

突然の大きな揺れによって、6,400 名を超える尊い命が失われ、多くの方々が大切な家族や日常を奪われました。この震災は、皆さんが生まれる前の出来事です。しかし、「過去の出来事」「歴史の中の災害」として終わらせてはならない、それが、今日この場に集う意味です。

阪神・淡路大震災が私たちに残した最も大きな教訓の一つは、「災害は、ある日突然、誰の身にも起こりうる」という事実です。そしてもう一つは、人は決して一人では生きられないということです。

震災当時、多くの命が「共助」によって救われました。隣近所で声を掛け合い、瓦礫をどけ、支え合ったのは、特別な人ではなく、ごく普通の市民の皆さんでした。

その中には、当時の高校生や中学生もいました。「自分には何もできない」そう思った瞬間に、助け合いは止まります。しかし、「自分にできることは何か？」と考え、一歩踏み出した人が、誰かの命や心を支えたのです。

今日、皆さんにお伝えしたいことは三つあります。

一つ目は、**「命を最優先に考える判断力を持つこと。」**です。

正しい知識を学び、いざという時に迷わず行動できる力は、日頃の意識から生まれます。

二つ目は、**「誰かを思いやる心を持ち続けること」**です。

災害時に最も力を発揮するのは、技術や体力だけではなく、「声をかける勇氣」「寄り添う気持ち」です。

三つ目は、**「震災の記憶を次の世代につなぐこと」**です。

語り継ぐこと、考え続けること自体が、亡くなられた方々への最大の追悼です。

阪神・淡路大震災から 30 年が経過しています。

しかし、私たちがその教訓を忘れない限り、震災は「過去」ではなく、「未来を守るための学び」であり続けます。どうか今日という日を、「命の重さ」「支え合うことの意味」、そして「自分はどう生きるのか」を考える一日にしてください。

最後に、震災で亡くなられたすべての方々に、心からの哀悼の意を表し、皆さん一人一人が、かけがえのない命を大切に生きていくことを願い、私からのメッセージとします。